

サラセン号来航

文政三年（一八二〇）十二月、会津藩は十年に及ぶ江戸湾警備の任を解かれた。浦賀奉行所は文政元年五月に来航したブラザース号の教訓からか、文政二年正月から奉行を二人制にして、一人は浦賀（在勤）、一人は江戸（在府）というように支配を強化した。

しかし、会津藩が警備していた台場などは、浦賀奉行所の管轄となり、与力・同心が増員にはなったものの、警備強化にはなっていない状態であった。

サラセン号来航

文政五年（一八二二）四月二十九日、イギリスの捕鯨船・サラセン号が来航した。

第一報は浦賀港に入港した廻船が房総半島の洲崎沖を航行している異国船ありというもの、浦賀奉行所は直ちに小田原藩と、浦郷の陣屋を構えていた川越藩、さらに房総半島の竹岡陣屋へ異国船来航の知らせを送った。

サラセン号は午後三時ごろ、浦賀沖へ停泊した。その時の様子を平戸藩主の松浦静山が記した『甲子夜話』には「船は浦賀を過ぎて富津の方へ一里ばかり乗り入れたので、浦賀奉行所の与力・同心が乗り付け、異人を諭して、浦賀へ引き戻したと言っているが、実は江戸へ向かっている異国船に追いついたが、浦賀の役人は乗り込むことが出来ず、遅々としている状況をみた水主（かこ）が異国船に飛び移り、浦賀の方向を指して江戸と言い、船の舵を切らせて、浦賀沖へ停泊させることができた」と記されている。

さらに、船乗りの機転で難を逃れた浦賀奉行所はこの事実を隠そうとしたが、船乗りの口には戸を立てることができず、知れ渡ってしまった。

異文化に触れる

『甲子夜話』は誰から上記のようなニュースを入手したのか。それはこの事件に通詞として幕府が派遣した天文方の馬場佐十郎に、松浦公の家臣が付いており、この者が江戸へ帰ってから見聞きした一部始終を話したことを記したものであった。

五月四日、浦賀に到着した馬場と足立左内は、浦賀の与力・同心の案内で異国船へ行き、この船がイギリス船で、薪水が欠乏して来航したことがわかった。また異国船の水夫にオランダ語ができる者がおり、この者を頼りに話が進んだことも記されている。

五月五日、異国船が旗をたくさん立て、きれいになっているので、その訳を聞くと、日曜日という祝日であるとのこと。船に磁石と時計があり、時計は高さ九疋ほどの砂時計で、これで時刻を計っている。舳先には人形があり、人形はヨーロッパの勇者サラセン像であり、それでこの船がサラセン号という船名であった。

サラセン号は捕鯨船であり、船内には大きな鋸が十本ほどある。さらに石のかまどが二か所あり、ここで捕ったクジラから直ちに油を取る作業が行われる。

乗組員はラシャの長袖や、木綿や麻のシャツ姿であり、髪は毛はざんざんりりぢぢれ毛で茶色。船長はもみあげから鼻の下までひげがあり、武者絵に描かれた朝比奈義秀のようである。眼は赤く、背丈は高いなど、日本人との比較も行っている。

また、船内にインコがおり、美しい鳥であることや、

船内の明かりがランプで明るいことなど、異国船探検が楽しく、驚きの連続であったことがよくわかる。

サラセン号は水や食料をもらい、五月八日浦賀港を出て行った。(了)